

【研修報告】

第三回社会科学部会歴史分科会高大連携の試み

夏期集中講座

「一九世紀アジア世界をどう教えるか」

歴史分科会主催のこの試みは本年度で三回目となり、生徒の学力向上と教員研修の双方を目的とした事業である。

今年度は八月三日（月）～五日（水）の三日間で設定した。メインテーマ「一九世紀アジア世界をどう教えるか」に基づき、一昨年、昨年に続き栄光学園中・高等学校を会場として開催された。午前は大ホールで生徒への講義、午後は場所を図書館に移して参観教員とのシンポジウムという二部構成はこれまでと同じである。

参加生徒は栄光学園二二名のほかに湘南一〇名、その他柏陽など一〇数校から二一名、計五〇名以上になった。シンポジウム参加者は一日目四八名、二日目五八名、三日目五〇名を数え、昨年より高校数も急増した。

本講座は全国の歴史研究会や他県歴史部会のみならず、大学・学会においても注目され、教育系マスコミにも取りあげられた。今回も他府県の高校教員（関東だけでなく関西圏からも）の参加も多く、東大、大阪大をはじめとした研究者も参加している。

講義は、午前の部前半五〇分は神奈川の歴史分科会に属するメンバーが「授業」の講義をおこない、後半九〇分を大学側の講師が講義した。高校と大学の両方の時間割をミックスして普段と同じような講義ができるようスケジュールを組むことにした。

今年、世界史・日本史のいずれにおいても、広い視点で「一九

世紀」アジアを見直すというのがテーマである。このような「大きな枠組み」を設定した授業は、教科書準拠のカリキュラム構成では制限（時間数の面でも）があり、また現場の教員にとっても、時代と地域を横断的に比較してまとめるのはなかなか困難である。この時期の世界の歴史をどのように生徒に提示できるか、その授業実践を参加者が実際に見て、加えて最近の学会の事情などを取り入れて授業に生かす機会としてほしい。

第一日（八月三日）「一九世紀の西アジア世界」

一〇〇〇～一〇五〇 澤野理（県立川崎工業高）

「西アジア」の範囲と一九世紀アジア史の枠組みと流れ、一連の抵抗と改革をおさえ、そしてこれらを理解するため必要な基本事項をまとめた。オスマン帝国への列強進出と内政問題、帝国内勢力自立（バルカン・アラビア・エジプト）、上からの近代化、イラン・アフガン問題とセンター過去問、諸大学の出題分析をおこなった。

一一〇〇～一二三〇 長谷部圭彦（日本学術振興会特別研究員）

東京大学入試の傾向と対策として論述問題（知識と構成・体系化）を分析。学習方法として「求めているものの把握」「構成メモづくり」を提示し、近現代の欧米中心の国際関係・世界経済を力説した。

講師の専門はオスマン帝国である。現在は受験教科書でも「オスマンIIトルコ」は「オスマン帝国」に変わり（正式国名はオスマンの至高なる国家 *Devlet-i Aliyye-i Osmaniyye*）、多様性・非ムスリムの存在が注目されていること、スルタンIIカリフ「伝説」、そもそも君主は「スルタン」ではなく「パーディシャー」と呼ばれること（「スルタン」は政府高官あるいは内親王の称号）、首都イスタン

ブル（ブルと伸ばさない）は征服以後もコンスタンティニエと呼
ばれ続けたこと、さらに一般的には「繁栄の地」デル＝サー＝デト
と言う等々、そして「レバント」の意味など専門ならではの知識が
披露された。

もう一つのテーマは「大学」。大学は一二世紀に誕生「集団・団
体」として誕生し、一三～一五世紀にはヨーロッパ文化圏へ拡大し
た。一六～一七世紀に南北アメリカへ、そして一九世紀になるとヨ
ーロッパ以外の文化圏にも設立される。

最後に受験生のために、学問とは「暗記の先にあるもの」として
世界史像をつくる方法とその内容を提示した。生徒が「仕方がない」
と受け取っている受験勉強の先にある「学問」の意味を高校教員が
生徒に伝えることはなかなか難しい。その意味では非常に興味深い
まとめ方であった。

第二日目（八月四日）「一九世紀の東アジア世界」

一〇〇〇～一〇五〇 杉山登（逗子開成高）

アヘン戦争以降の中国通史と日本との関係を、日頃行っている授
業そのままのかたちで受験生に講義した。基本的知識と流れを、脱
線することなく進める。東アジアの近現代史学習の基本中の基本で
あるアヘン戦争とアロー戦争の経緯と結末、太平天国と洋務運動、
そして朝鮮・日本・琉球へ重要項目をしっかりと押さえたコンパクト
な授業となった。

一一〇〇～一二三〇 桃木至朗（大阪大学教授）

教授は横浜出身で毎年当部会と本県受験生のために「仕事」をは
るかに越える協力をいただいている。

最初に大阪大学二次試験解説を導入として、東アジア近代史の「お
さらい」を三つの時期（一八世紀末～一九世紀前半、一九世紀半ば
～後半、一九世紀末～二〇世紀初頭）に分け、「大学で研究したく
なる東アジア史」を提示した。一九世紀の近代世界システムの拡大、
東アジア家族経営の強さ、東アジア知識人と国家建設の三つである。
植民地化されたアジアの商業がこれまでのイメージとは異なり、し
ぶとく適応していたことを、「家族経営」や「経営マインド」とい
うキーワードで再評価し、加えて日本・中国・朝鮮の対応事例を挙
げ、国家意識の存在と結び付けて現代へのつながりを解き明かした。

第三日目（八月五日）「一九世紀の日本」

一〇〇〇～一〇五〇 児玉祥一（上鶴間高）

幕末から明治期の日本について、国内の経済動向を列挙し、商品
生産の発展にもなつて日本経済が列強に従属しない強さがあった
点をまず強調した。続いて明治維新で日本がどう変わったのかを、
自由民権運動、立憲政治、外交面の対応から見えてゆくという授業構
成であった。

一一〇〇～一二三〇 加藤陽子（東京大学教授）

加藤氏は栄光学園歴史部の生徒への現代史の講義をまとめた『そ
れでも、日本人は「戦争」を選んだ』（朝日新聞社 二〇〇九年一〇
月）を発行し、その縁で今回講義をしていたことになった。

授業はまず日本社会の戦前・戦後の違いに気付かせ、次いで島国
日本の「海峡」を取り上げた。占守海峡（千島樺太交換条約）・南
西諸島（琉球処分）・台湾海峡バシー海峡（日清戦争）・間宮海
峡（ポーツマス条約）・対馬海峡・朝鮮海峡（韓国併合）から日本

の海外進出が見えるという着目であった。

次いで日清戦争にいたる流れを、次第に形成されてゆく世論あるいは国民の意識という面に求め、書籍・演説（福沢諭吉、山県有朋、田中正造、陸奥宗光）を列挙した。

【午後研究会の要旨】

三日間とも熱気あふれる討論が多岐にわたり行われた。まず生徒が午前の授業アンケート用紙を読み上げ、それについて講師が授業の目的、自己評価などをコメントすることからスタートし、次いで参加者を交えて質疑応答を行った。大学教授や研究者による解説もあり、議論は時代・地域・分野を越えてとてもすべてを記すことはできない。ここでは議論が集中したテーマのみをリストアップする。

●一日目 一四：〇〇～一七：〇〇

- ・「帝国」は日本人通詞の造語であった。
- ・「民族」の曖昧さ。「王たちの王」が「民族」を区別して治めた。「法圏」とみるならば「帝国」には法体系が複数ある。
- ・「継承国家」を標榜した帝国はローマくビザンツくロシアがある。モンゴルは「中華帝国」を受継ぐが、モンゴル継承国には肯定派と否定派がある。一九世紀日本も「帝国扱い」。
- ・「条規」は一八七〇年の曾国藩にたどれる。条約「不平等条約のこと」、条規「平等なもの」。清側の期待をこめた表現であったようだ。
- ・ミドハト憲法は「アジア初」との評価だが、オスマンはヨーロッパかアジアか。立憲思想はヨーロッパからの「外発的」な思想で

あり「非ヨーロッパ」でよく見られる。その意味ではアジア。

スレイマン時代までは「重心はヨーロッパ」だが受験のまとめ方に反する。「文化圏」としてのオスマンは問題なく西アジア世界だが、ヨーロッパ（&東欧）史なしにオスマンは語れず。

・文化圏イコール「文字」である。当時は五つの文字文化圏があった。（漢字・梵語・キリル・アラビア・ラテン）。オスマンの文字改革とは「アラビア語との決別」。ここから「トルコ」はヨーロッパになった！

・文字は教育とリンクする。伝統的イスラーム教育と軋轢を生じることが、どちらも教材テキストが必要。アラビア語文字の伝統と大量出版⇨活版印刷導入は順調でなく、アラビア文字派は、写字生の失職や美しい字体が不可だとして一九世紀末まで抵抗した。

・「世界システム」における中東の経済的地位。

英土通商条約（一八三八）でオスマン地域商業が失墜。「植民地化」が国内外の国際部分業システムを破綻させ、オスマン、エジプトともに外債借金で国際管理下へ入った。

・インド綿布の問題。イギリスはインドの綿糸生産を促進。「駄目になりっぱなし」でない。世界市場への「組み込み」は一方的貧困化ではなく、マルクスの理解「産業の壊滅」は起きていない。だからインド綿を原料として大阪の綿工業が成長した。

・「パックス・ブリタニカ」崩壊は一八七三年の世界不況による。この対応が「第二次帝国主義」のスタート。オランダの「強制栽培制度」廃止は遠隔地貿易が不振になり国際競争力を失ったため。一八七三年のスエズ運河買収から新しい段階に進む。

・オスマン軍制改革にはドイツが関与した。そもそも海軍は「軍艦

購入」で即変われるが、陸軍もすでに一八二六年のイエニチュエリ殲滅の下地があり、一八七〇年代、モルトケ経由で「プロイセンモデル」を導入した。

・ウィーン会議にオスマン帝国は参加したか微妙なところがある。会議にオスマン代表も「いた」のは確か。しかし「神聖同盟」はオスマン警戒感から結ばれた。

・「スルタンⅡカリフ制」の同時代史料はない。一八世紀につくられた「伝説」。オスマンの権威しか残っていない時代になって積極主張され、ある程度有効（そして無効）だった。この伝説ゆえにアチエー王国は対オランダ闘争で「オスマンの助けがくるからガンバレ」と鼓舞した。だが一八世紀のオスマン帝国研究はそれほど進んでいないので確定ではない。

●二日目（一三：三〇〜一七：三〇を過ぎても続いた）

・琉球処分の際、沖縄では親清派知識人がいた。士族知識人で清へ脱出したもの多い。

・イギリスの言いがかり「三跪九叩頭」。副島種臣が西洋式に皇帝に対面した。マカートニーはしないで対面。アマーストは会ってもらえず（ロシア公使も同様）。

・タンジマートと洋務運動は明らかに異なる。タンジマートは明治憲法に似たスローガン。いわば「オス体西用」（長谷部氏の造語）。

洋務運動は一部官僚の間だけで民間に何も影響がなかった。フランス法が導入されたが官営産業・民間興行の動きはなく「殖産興業」「軍国化」とセットで行われた。そのあとの「変法」は「明治モデル」。日中は並行して改革の流れが見える

○講師コメント

【植民地支配を押し付ける側と受け入れる側】

・植民地経営の違い。「同化主義」のフランス、儲けがあれば「どうでもいい」主義のイギリス

・「経営マインド」アジアの小農社会は低賃金労働者の供給源。ちいさな家族経営の「強み」。ゴマ油、ヤシ油など確実に需要がある製品をつくりだす。

・清の「柔軟性」専制国家だが全体主義ではない。末端に権力は及ばず、中央は地方を「放っておく」。権力の密度が薄く「封建的」

○補足コメント

・オスマン帝国の支配も「薄い」。君主（パーディシャー）の「力が及ぶ範囲」でのみ専制。できたのは大宰相のクビを切れるぐらい。アブドウルハミド二世は「専制的」との評価だが、それは憲法を停止した（宮中以外のことには口を出した）という点だけ。

○講師コメント追加

・日本江戸期とアジアの経済繁栄は共通であり、「アジア停滞論」は適切でない。総じて一八世紀は「閉じこもり」「横這い」「地方の時代」。清もオスマンもムガル帝国も同様（ムガル政府の力は藩のマハラジャまで及ばない）

・植民地の「宗教」と「社会の進化」を安易に結びつけるのは危険。アジアではヨーロッパ優位論「ダーウィニズム」Ⅱ弱肉強食とはちがう論理が働いている

・植民地文化は「伝統的」ではない。実は新しくできたモノが多い。例として「アオザイ」一九世紀末に登場。「バリ芸能」は一九二〇年代から（オランダ植民地博覧会の出し物）。

○ 国民国家論

・ 東アジアでは昔からプロト「国民国家」があった。そもそも NATION はスターリンの発明で近代国民国家を念頭に置いた。東アジアでは「わが民族はもつと昔からいた」。

・ 日本のケースは典型的な『戦争で国民ができた』。①「本居宣長が考え」、②幕末の「攘夷」を経て、③日清戦争で庶民も「国民」であるとの意識を持つ。中国は①②の時期は日清戦争で、③は抗日運動を通じてようやく意識がでてくる。

・ 朝鮮は日清戦争で中国従属をついに脱した。「大韓皇帝」の称号がそのあらわれ。だが中・韓とも「被害者ナショナリズム」からうみだしたものの。ナショナリズムは「種が滅びる危機感」が生み出す。ベトナムでは潘佩珠から。だがいまではインテリはフランス好きで大衆はアメリカ好き。中国に同化されたくないの、ベトナム語の表記には漢字を廃してローマ字を採用。

○ 東アジアのイスラームネットワーク、華人ネットワークについて。

・ 中国人ムスリムは太平天国滅亡後、上海でメッカ巡礼の出口としてコミュニティを作る。その後企業を立ち上げ香港・スリランカにも進出する。二〇世紀初めに学校を建て、アズハルへ派遣される者もあらわれる。

・ インドネシアのムスリムはスエズ運河開設で巡礼急増。帰国の際ワットハーブ運動をアジアに持ち込む。アラブ人グループ（ハドラーミー商人）も進出し、ボルネオに一時独立国家を建設する。

・ 華僑資本は前近代的との評価だが、「同族ビジネス」ばかりでない。東アジア資本主義の評価は変わりつつある。

・ 一九世紀東アジアに、日本を入れて歴史を考える必要がある。日

本の影響でアジアが変わった点に注目。

・ 「世襲的被害者意識」は問題。韓国で「日本も西洋の被害者」という見方も出てきた。被害者意識の循環を断つ歴史認識が望まれる。

三日月 一三三〇〜一七三〇

・ 明治期に「すばらしい政治家」が輩出したが太平洋戦争時期には出なかった（『坂の上の雲』のように）。その理由は「失敗学」がなかったから。勝ったことばかり伝わったのでは。

・ 日清戦争前後の朝鮮宮中ではアメリカ&ロシアのお雇い外国人が活動。閔妃暗殺以後、「ナショナリズム」が見えてきた。日清戦争〜日露戦争のあいだ朝鮮はロシア中心に動いていた。「朝鮮王はロシアの公使館にいる。そんな国が独立国か！」と清も憤慨。大韓帝国宣言（一八九七）をロシアが真っ先に承認している。

・ 国民国家における「地図」は重要。測量して国土に確定し編入。どの国も自領を赤で描き、世界地図の「中心」におく。

・ 日清戦争イコール「国民国家」ではないが、急速に進んだ時期。その状況を示す事項を文化的な面であげると三点ある。

台湾領有の際、官報に「標準語」が登場。

国民文学『日清戦争実記』が新聞に掲載され戦意高揚に貢献。議会での「意見吸い上げ」がなされたこと。政策決定は政府首脳のプロパガンダでは不十分とされた。

○ そのほかの注目すべきコメント

・ 江戸時代に出現した豪農は明治維新後も「世直し一揆」首謀者と

してそのまま生き残る。江戸後半期、農民は特産品販売で経済力急上昇。農村部では教育力も上昇していた。

・幕末の幕府政治は「一方的」でなく、すでに「公論」化していた。阿部正弘は全国に意見を求め、大名・下級武士、商人にも開かれ、遊女が勝手に上申書をだすような事態となった。

・オスマン・清・日本の比較で改革の成功と失敗がよく見える。タンスイマートと洋務運動と明治維新。トライしたのは日本だけではない。だが成功した国家である日本も、国民の生活という点で見ると決して「豊か」になってはいない。

三日間を通じての印象と課題

昨年の報告では、今後の課題は「国民国家」であると記したが、まさに本年度はこれが研修の共通テーマとなった。

欧米歴史学が創作した「国民国家」という強力なフィクションを、あたかもはるか昔からあったとするような歴史教育は、いまでも途上国や日・韓・中でも主流である。研究者の一部にはそれを越えようとする動きはあるが、到底一般のレベルには至っていない。

いわば国民国家史を推進してきた「本家」たる欧米では、このことに気付き始め、ようやくドイツとフランスのあいだで共通の歴史教科書づくりが始まった。ところが日中のあいだで着手された共通の歴史づくりは、戦後の部分についてはなされないという結果になり、双方の都合が優先された点では、まだまだ抜け出せていない。顧みれば日本においても「国民国家」礼賛的な歴史教育への逆戻り（教科書検定の問題は言わずもがな、「司馬史観」ばかりなどはその最たるもの）が明白にうかがえる。このような歴史教育への危惧

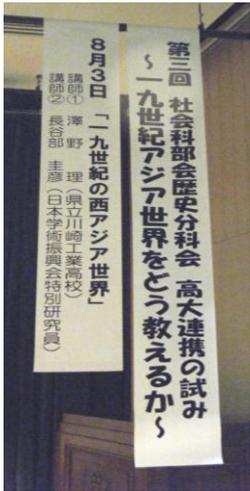
が一致した結論である。

「いま」につながる近代史を教えるには、どこかの国の成功物語を強調することではなく、「国家」にとらわれないグローバルな、そして被害者ナショナリズムあるいは裏返し of 反自虐史観でない歴史教育が求められている。

（文責 横須賀大津高校 佐藤雅信）

第3回 歴史分科会高大連携の試み

《第一日目》



歴史分科会理事長挨拶



高校側教員澤野氏



受講生徒



ゲスト講師長谷部氏 (学術振興会)



午後研修会 講師と司会陣 (栄光学園図書館)



研修会加者の盛況

《第二日目》



高校側講師 杉山氏



大阪大学桃木氏は今年も三日間通して参加



桃木氏は自ら
パワーポイント
を操作して講義
《第三日目》



午後研修会講師と司会陣



二日目研修会は大幅時間延長



社会科部会長挨拶



冒頭に講師が前日の生徒質問に答える



高校側講師児玉氏



東京大学加藤氏



参加者は日本史教員も多かった



最終日研修会の講師と司会陣



3日目研修会 多くの大学関係者が参加。
テーマゆえに日本史教員の発言が積極的であった